

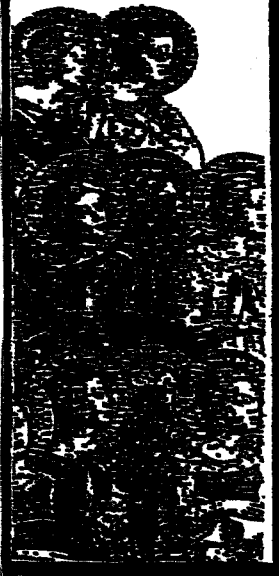


あんげろす

地獄と現代人

齊藤栄一

英語の *thunder* という単語は現在では雷という意味で用いられますが、それはサクソン人の *Thunor* という雷神を表す言葉にまで遡ることができます。「ヘンギストと一緒にイングランドにやってきた者たちに、天空の雷鳴を指すのか、それとも怒れる神を指すのかと尋ねても、その相違」を彼らは説明できないだろうとボルヘスは言います（『詩という仕事について』鼓直訳）。近日刊行予定の『紀要』の扉写真は中世イギリスの地獄図です。当時の欧州の人々はそのようなイメージを実在するものとして受けとっていたでしょう。「地獄を見た」という言い回しを軽々しく用い、地獄は単なるメタファーだと割り切っている現代の我々の精神生活は中世の人々のそれより豊かになったと言えるでしょうか。



第 56 号
2011 年 12 月

いい話になるはずだった話

真崎隆治

いい話を書こうと思っていた。しかし、いい話に暗雲が立ちこめ、原稿締切の今日、そのまっただなかにいる。それで、いい話が書けなくなった。

話はこうである。私たち夫婦は軽井沢に引っ越してから地元の混声合唱団に入った。女声が15人に男声が4人の弱小合唱団である。それでも結構いい感じで歌っていた。しかし大問題があった。バスパートが私一人なのである。これでは合唱にならない。そこへきて、われわれ単独では演奏会はむずかしいというので、ジョイントを組むことになったが、その相手がなんと18人の女声合唱団であった。ただでさえ萎縮していたバスは女声の大軍の前に圧殺されてしまった。

ところで、今年もジョイントで演奏会をすることになった。たった一人のバスの必死の懇請により20人ぐらいの混声合唱団と組むことになった。探しに探してバスも一人獲得できた。ここまでは、まあいい話である。

東北が大変なことになり、日本中が青ざめ、なんとかしなくてはという気になった。義援金の箱が諸処にもうけられ、いくばくかず箱に入れる日が続いた。明治学院教会でも受付に箱が置かれ、これは仙台のある教会経由で、教会の復興ではなく、その地域の人々への支援金として牧師自ら出向いて手渡ししたりした。しかし災害の規模は通常の想像力を超越し、私たちの努力は砂地にじょうろで水をまいているような気がしてきた。そこへきて、日本赤十字社に集まった義援金の半ばが配分できずに滞っているという話が聞こえてきた。また、現地からは、仮設住宅に入っている人たちが支援金で食べるのには困らず、さりとて仕事があるでもなく、パチンコで日を過ごしている、という話も聞こえてきた。いや、これは私が実際に行って耳にしたことである。莫大な額を抱

えて、平等にどう配分するかは赤十字社ならずとも頭を抱える問題だ。しかし私の入れた千円札たちはどこでどうしているのか、はたして役立っているのか、と思うとあまり落ちていてられない。

そこで考えた。私たちのジョイント・コンサートの場で、被災地の活動停止ないし困難になっている合唱団を支援するのはどうだろう。この提案は合同打ち合わせ会でなんとなく了承された。この「なんとなく」がくせ者であった。

ともあれ私は対象探しに奔走した。「大都会ではなく、軽井沢と同じぐらいの町で、20人前後の団員、活動困難ながら再起を目指して頑張れる合唱団」というのが条件である。宮城県合唱連盟事務局から、石巻市河南地区の女声合唱団が紹介されてきた。私は石巻に行き、小学校の1室を借りての練習に立ち会わせていただいた。常の練習場は屋根が落ちて使えないのである。メンバーは12人になっていた。だが、みんな驚くほど明るかった。まだ復興の先行きも見えない町での合唱活動は土地の人から白眼視されるのではとの心配は杞憂にすぎず、土地の人たちもこの明るさを自分たちの力と感じているようだった。

彼女らのエネルギーの凄さは、11月19日に軽井沢で開かれるコンサートに行きたいと言いだしたことである。結局、8人のうち7人が来ることになった。外からは見えない無理を重ねてのことだろう。ここまで彼女らを動かしたのはなにか。私たちの提案した一時的な金銭の支援ではなく、合唱を愛好する仲間として、山の仲間と海の仲間が固く手をとりあうことの喜びでなくてなんであろう。そこから生まれる新しい未来へのつながりこそが、何としても軽井沢に行こうという思いになったのだ。その姿は美しく、感動的であった。このことは私の所属する合唱団で両手をあげて受け入れられ、すぐに歓迎体制が整えられ、役割分担が決められた。その日、あの人たちはどんなに喜んでくださるだろう。

ここまでがいい話である。

ジョイント相手の合唱団の代表者がとんでもない人物だったのだ。曰く、石巻から7人も来るのは被災者のすることではない。入場券を買って入るのなら一般の人と同じだから拒むことはできないが、特別扱いはお断り。ましてみんなの前で紹介するなど絶対に拒絶する。お宅の合唱団でもこれに関わることは、なにもしゃべっても書いてもならない。こちらが認めたのは義捐金を被災地の合唱団に送ることだけで、その他は一切なし。

暗雲とは、ここにいたってなお続くこの人との不毛な議論、というより、もはやのしりあいのことである。ののしるのは概ね向こうだ。論理性ゼロ。論点、主張点は自分の都合でくるくる変わる。他者に対する思いやりや、愛などましてあるものでない。これでは有効な答えようも落としどころもなく、ただ精神が悲しく消耗するだけである。

しかし、ここで思う、イエス・キリストはこのような人のためにも十字架につかれたのだ、と。

まざき・たかはる（名誉所員・本学名誉教授）

赦し

司馬純詩

宗教部のアメリカホームステイ・スタディーツアーは、独立宣言の州ペンシルベニアを訪ねる。ホストの教会ファミリーは、ランカスター市とその周辺に散る。J・C・ヘボンが生まれたミルトンから、約100マイルの地である。ヘボンはミルトンアカデミーでスコットランド出身のカークパトリック牧師の下でいわゆるランカスター方式の教育を受け、1829年14歳で大学入学資格を獲得する。

ツアーで学生はクリスチャンファミリーで日常を共に過ごし、教会活動の一端に触れる。共に祈り、食事をし、家事をして会話をする。これが学生の忘れえぬ体験となるのである。今年は21名が参加した。

アーミッシュ農家の多いランカスターにはペンシルベニアダッチ語を教育するアーミッシュスクールがある。06年10月2日、そのひとつで銃の乱射事件があり、いたいけな少女たちが殺された。

(1) 射殺犯チャールズ・ロバーツ（運転手32歳）は武装してウエストニッケルマインズスクール（8年制）に押し入り、男子生徒と大人を解放し、その後残りの少女10名を並ばせて「銃撃」したという。警察が踏み込んだ時、チャールズはすでに自殺を果たしていた。

事件には次のような話が残っている。

現場で4人の少女が殺害され、1人が病院で亡くなる。13歳のマリアン・シュトルツファスは「幼い子を撃つのなら、私を先に撃って」と名乗り出、二人目に亡くなった。他に5人が重傷を負い、現在も体に障害を負っている。

全世界を震撼させた事件は、同時に全世界に大きな感動を与えた。

事件後、被害者の祖父一人は報復を禁じ、「犯人を憎んではいけない」と述べ、父の一人は「犯人にも父母と妻と魂があ



る。神のみ前にて彼は裁かれる筈」と論ず。

アーミッシュは被害者家族も含めて、チャールズの葬式にも参列する。報道に対して被害者家族は「射殺犯を赦します」と述べ、「私たちへの弔意に感謝します。が、どうぞ加害者の家族のためにお祈り下さい」と要請する。

逸話は改めて、全世界の人々にキリスト教の赦しのところを覚えさせた。アーミッシュの敬虔な生活を知るアメリカでは、全国で被害者のために献金が行われた。

スタディーツアーの一日9月1日(木)夜、ランカスターのウエストミンスター・プレスビテリアン教会で犯人の母と被害者アーミッシュの家族が事件について話す集会があった。日本人伝道に献身するルース・パワー女史の企画。明治学院大学卒業生の信徒妙子プロナーさんと中村加寿子さんのお力による集会である。

集会ではチャールズの母テリーと被害者二家族5人が、おもな参加者の在住日本人のために当時の話をしてくれた。通訳は現地の中山牧師が担当。

自殺した射殺犯チャールズの父はボランティアとしてアーミッシュ家族の送迎(アーミッシュは自動車を持たず、運転をしない)をする友人家族でもあり、身内の犯行に心から悲嘆していたという。そんな家族のことを聞いて、アーミッシュは慰問に訪れたのである。家族はアーミッシュの礼拝にも参加したという。淡々と語る母テリーも、事件直後のことに触れたときは嗚咽を隠しきれない。この間、被害者のアーミッシュ家族はテリーの傍らに静かに腰かけ、何も語らない。集会を通して始終にこやかに対応しているのである。

3年前のツアーで、メノナイト派家族にステイした学生のひとりは、夕食後の会話で事件に及んだ時、ホストマザーに聞いたことがある。「子供を殺されて、ほんとうに犯人を赦せるのですか」。こ

ともなげに「赦します」と答えたマザーに「その時、思わず鳥肌立ちました」と学生は私に報告した。集会で表情を抑えているアーミッシュ家族の静かな信仰心に、私たちは海の底を見るような想像を絶する強さを感じたのである。

外部の献金を受け取らないアーミッシュも、事件の広がりからこの時は好意を受け取ったという。事件現場のウエストニッケルマイنزスクールは取り壊され、跡地は芝生が広がる鎮魂の地となっている。今は別な場所に新しく学校が建てられ、ニューホープスクールとして同じペンシルベニアダッチの教育を行っているという。

注(1)

(http://en.wikipedia.org/wiki/Amish_school_shooting)

しば・じゅんじ(所員、国際学部教授)

教会音楽を合唱しつつ過ごす日々

岩崎次郎

♪東京スコラ・カントールムのこと

東京スコラ・カントールムという混声合唱団が1979年2月に結成されました。この合唱団はその後順調に活動を続け、先月21日には、その第54回定期チャリティ・コンサートを開催したところです。

この度のコンサートの収益は日本聾話学校の創立90周年記念事業のために捧げられました。日本聾話学校の名を聞いても、それを明治学院に関連ある学校として認められる読者は多くないだろうと思います。

この学校は明治学院の教師であられた A. K. ライシャワー博士夫妻（元駐日米国大使、E. ライシャワー博士のご両親）と福音教会宣教師、L. F. クレーマー女史によって 1920 年に設立されました。ライシャワー先生のお嬢様、フェリシアが聴覚に障がいをもっておられたことから、この学校設立を思い立たれたとのこと。創立以来、耳に障がいを持つ子供たちが、赤ちゃんのときからそれぞれによく適合した補聴器と人工内耳を身に付け、残された聴力を徹底的に活かし、口話法によって心からの対話を重ねて人としての土台作りに励む、「聴覚主導の人間教育」を行う日本で唯一の私立学校として多くの社会人を輩出してきました。

私たちの献金がこの学校の校舎の耐震補強などの改修工事費用の一端をまかなうことは合唱団員一同が喜びとするところです。

東京スコラ・カントールムは創立後二年目の 1980 年 12 月 17 日に東京カテドラルで開催した第 4 回コンサートの収益全てを「東京いのちの電話」に捧げました。これがこの合唱団の最初のチャリティ・コンサートとなりました。全ての定期公演をチャリティ・コンサートとすることに決めたのはその数年後のことでした。

さて、この合唱団は 32 年前に五人のクリスチャンが発起人となってスタートしたのです。私はその五人の一人でした。五人はそれまでは東京バッハ合唱団のメンバーとして日本語でバッハの合唱曲を歌っていました。東京バッハ合唱団では日本語でバッハ作曲の信仰の歌を歌い、日本人聴衆に聴いていただくことの素晴らしさを体験しました。明治学院時代の友人の、牧師である父上がこの合唱団のコンサートに来てくださり、「日本語で聴くバッハは素晴らしい！ヨーロッパの教会歌曲によって心が動かされる体験が出来た！！」と言ってくださったことは未だに強い印象を私の心に残しています。

しかし、五人は「バッハ以外の曲も歌いたいなあ。」「グレゴリオ聖歌から現代曲まで、多くの教会音楽遺産がある。それらの中から良い曲を日本の教会に逐次紹介して行きたいね。」という思いを共有するようになり、東京スコラ・カントールムを結成したのでした。

♪わたしたちのレパートリー

創立以来、ルネサンス、バロック、そして近・現代の教会音楽を歌ってきました。地域的にはイタリア、スペイン、ドイツ、フランス、フランドル、イギリス…など各地に亘ります。日本の作曲家に委嘱したものもあります。バッハはたびたび歌いましたがプリテンやジョン・ラターなど現代イギリスの作曲家も取り上げました。

そうです。時代的に言うとバッハ（独）やバード（英）パレストリーナ（伊）など、16~17 世紀の作曲家が多いのですが、近・現代も歌っています。

♪わたしたちが演奏で心掛けていること

この合唱団の団員一人ひとりが常日頃心掛けていることは信仰の証として演奏表現することです。そのために新しい曲に取り組む際にいつもすることがあります。

まず歌詞の逐語訳を作り、またフレーズごとに原詞と訳詞を対照させた対訳を作ります。これによって団員の誰もが日本語の歌詞を歌うかのように、心と感情を調べて曲と向かい合うことができるのです。

次にすること…外国語を歌う場合、全員が同じ発音で歌詞を歌えることが優れた演奏を提供するための基礎条件のひとつです。その言葉を現地の人々並みに話せる団員がいる一方、そうではない団員もいます。そこで新しいプログラムに取り組む際は、早い段階で歌詞を好ましい発音で朗誦する練習をします。講師は団員が務めることも多いのですが、必要に

応じて、課題の言語を母語とする方をお招きして学ぶようにしています。

そしてコンサートでは、お客様に歌詞が伝える意味と情感とをご鑑賞いただくべく、対訳（原詞と訳詞とがフレーズごとに対応する）をご提供しています。

♪私たちのグループを指導してくださった方々

32年前、合唱団の旗揚げについて相談に乗ってくださり、指導してくださったのは聖グレゴリオの家・宗教音楽研究所の所長、橋本周子先生でした。合唱の指導のみならず、グレゴリオ聖歌の基礎も教えていただきました。東久留米の研究所から祐天寺の我々の練習所まで指導に出向いてくださることは、週一度とはいえず、大変なことでした。

毎週の練習の指導はその後、常任指揮者にお迎えした黒岩英臣先生（副指揮者として鈴木成夫さん）に替わりましたが、橋本先生は折々にご指導くださり、ドイツの第一級の指揮者の招聘の企画には中心のお働きをいただき、また合唱団が過去四回行った「ヨーロッパ教会音楽研修旅行」については計画段階から、同行しての案内やご指導までお世話になっています。これまでにドイツからは客演指揮者としてH. R. ドレンゲマン、ペーター・ノイマン、そしてイェルク・シュトラウベの三氏をお招きしました。（橋本先生には現在もさまざまにご指導いただいています。）

2005年からは日本有数のカウンター・テナーであり、指揮者としても広く活躍しておられる青木洋也先生をお迎えしています。

いわさき・じろう（協力研究員）

研究所雑録

一年が過ぎるのがこんなに早く感じるのは、年のせいだけではないでしょう。震災後の9ヶ月、ずっと心ここにあらずのような状態のまま、時間が飛ぶように過ぎていったと感じておられる方はおそろく決して少なくないのではないのでしょうか。それでも街は、あの節電騒ぎが嘘のように、クリスマスのライトアップに彩られる季節を迎えました。キラキラ輝くツリーやイルミネーションを見るたびに、今年ぐらいいらないのではないかいや今年こそ必要なのではと、不毛な自問自答を繰り返しています。

巻頭言をお書きくださった斎藤先生はじめ諸先生方のご協力のもと、あんげろす第56号を皆様のお手元にお届けすることができました。執筆してくださった先生方に改めて御礼申し上げます。

真崎先生と岩崎先生のエッセイは、なんと偶然にもコーラスをめぐる人間模様について。内容は違えども、どちらも「奉仕」の意味を考えさせられます。「石巻から7人も（軽井沢に）来るのは被災者のすることではない（カッコ渡辺）」というくだりでは、知り合いの原発被災者のことば「酒飲んだりゴルフしたりすると被災者のくせにって言われんだよなあ（福島弁）」を思い出しました。司馬先生のスタディツア報告にも心動かされました。死刑支持が8割を越す日本社会で育った学生たちの驚きはどんなに大きかったことでしょう。是非この驚きが無駄にせず、厳罰化が進行するこの社会の問題について思索を深めて欲しいと願います。

さて本研究所は秋学期も皆様のご尽力により公開講演会、公開研究会、さらに賀川学会を開催いたしました。また校友会との共催企画である交友講座も多くの受講生に恵まれ、無事全回終了することができました。1月以降も様々な計画が用意されております。今後とも引き続き



キリスト教研究所の諸活動へのご理解、
ご協力を賜りますようお願い申しあげます。

わたなべ・ゆうこ (主任・本学教養教育
センター准教授)

2011年8月-12月の研究所活動 (詳細は各チラシをご覧ください)

所員会議

第4回

日時：2011年10月26日(水) 14:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第5回

日時：2011年11月23日(水) 14:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

所長選挙

日時：2011年11月23日(水) 14:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

公開研究会

キリスト教文化研究PJ

椎名麟三生誕100年記念講演

「椎名麟三と戯曲」(椎名麟三文学の戯
曲の面白さ)

講師：橋本茂(本研究所名誉所員、本学
非常勤講師)

成井透(作家、たねの会)

水谷内助義(青年座製作者)

日時：2011年10月1日(土) 13:00-

場所：白金校舎本館92会議室

研究会

SCA歴史編集PJ

第4回

日時：2011年9月22日(木) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第5回

日時：2011年10月27日(木) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第6回

日時：2011年11月10日(木) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第7回

日時：2011年11月25日(金) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第8回

日時：2011年11月29日(火) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

第9回

日時：2011年12月8日(木) 13:00-

場所：白金校舎キリスト教研究所

公開講演会

第3回

「時こそ今は一私と明治学院と文学一」

講師：太田治子(作家)

日時：2011年12月10日(土) 15:00-
16:30

場所：白金校舎2号館2101教室

主催：明治学院大学キリスト教研究所

共催：明治学院大学校友会

賀川豊彦学会

基調講演

「〈第三の道〉と賀川豊彦～『友愛の政
治経済学』をめぐって～」

講師：中山弘正(本研究所名誉所員、本
学非常勤講師)

日時：2011年10月29日(土) 14:00-
16:00

場所：白金校舎本館92会議室

2011年度明治学院大学へボン塾校友講座

開催時間：土曜日3限(13:05-14:35)

開催場所：2101教室(第1回-第9回)、

10階大会議場（閉会式）

主催：明治学院大学キリスト教研究所、
明治学院大学校友会

講師：中島耕二（本研究所協力研究員、
本学非常勤講師）、村上文昭（本研究所
協力研究員）、米沢和一郎（本研究所協
力研究員、本学非常勤講師）

- 第1回（10/1）ヘボン1 中島耕二
第2回（10/8）ヘボン2 中島耕二
第3回（10/15）ヘボン3 中島耕二
第4回（10/22）島崎藤村1 村上文昭
第5回（10/29）島崎藤村2 村上文昭
第6回（11/12）島崎藤村3 村上文昭
第7回（11/19）賀川豊彦1 米沢和一郎
第8回（11/26）賀川豊彦2 米沢和一郎
第9回（12/3）賀川豊彦3 米沢和一郎
第10回（12/10）閉会式
フィールド・ワーク（11/5）同日三班実
施

新着図書

（2011年8月-12月）

- ・『福音と世界』No. 8、新教出版社、
2011。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版社、
2011。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版社、
2011。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版社、
2011。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版社、
2011。
- ・『福音と世界』No. 1、新教出版社、
2012。
- ・『平和をつくる教会をめざして』、
（袴田康裕編）、日本キリスト改革派西
部中会 世と教会に関する委員会、2009。
- ・『時こそ今は』、（太田治子著）、筑
摩書房、2011。
- ・『心映えの記』、（太田治子著）、中
央公論新社、2005。

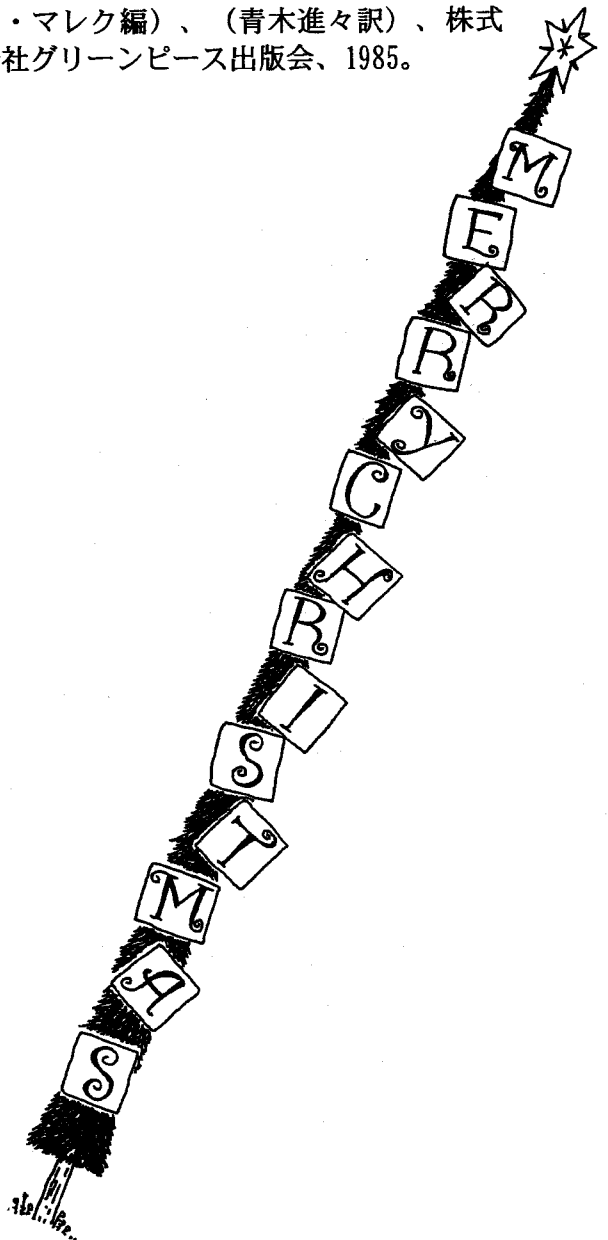
・『石の花 林美美子の真実』、（太田
治子著）、筑摩書房、2008。

・『日本の植民地支配と「熱河宣教」』、
（渡辺祐子、張 宏波、荒井英子著）、
いのちのことば社、2011。

・『近代文化の原点—築地居留地
Vol. 4』、（NPO 法人築地居留地研究会
◎）、2011。（原豊協力研究員寄贈）

・『日本讃美歌・聖歌 研究書誌 礼拝
音楽研究 No. 10 別冊』、（手代木俊
一）、キリスト教礼拝音楽学会、2011。
（手代木俊一協力研究員寄贈）

・『子どもの目に映った戦争 wojna w
oczach dziecka 第二次世界大戦ポーランド』、
（イヴァニツカ・カタジナ、ドバ
ス・マレク編）、（青木進々訳）、株式
会社グリーンピース出版会、1985。



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第56号

2011年12月15日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩